
穩仁 オニ の繰り言

kuro-kmd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

穩仁 オ二 の繰り言

【Nコード】

N3886P

【作者名】

k u r o - k m d

【あらすじ】

だいたい、何もかも我らに頼り過ぎだよ。人間は。

不思議に出会えばいいも悪いも全て我らの所為だもんなあ。

鴉天狗とか何なんだ、ダサイし、あのデカい鼻は男根の象徴なんだけ。

カンベンしてほしいよなあ。

で、今度は何？雨乞いか？冷夏よけか？

え？…川を曲げろって？…アホか。

お願い聞いてほしいの

霧が深くなっていた。前に行く尻端折りを懸命に追いながら、男は懷に抱いた奉書を確かめた。粗末な衣の下で、粗末な紙ががさがさと鳴る。そうする隙にもはぐれぬよう、男は懸命に笠を被った頭を上げた。

ここで置いていかれてはたまらぬ。

オニの山は昼なお暗く、分け入る者を拒むように鬱蒼と道を閉ざしている。獣道のような狭い痕跡をようよう鉋で払いながら、大の男が二人、震える脚を鼓舞して歩き続けていた。もうどれだけ登ったか。

「なあ、おい、道は確かか。かれこれ何里も歩いてやしないか。狐狸に化かされると、山の中をぐるぐると一晩中歩かされるというが、そんなことはありやしねえか。」

うるせえ。気の立った声が短く答えた。前に行く男も、好きで先頭を取るわけではない。一昨々年に願い事を持参した時、後ろに付いていたというだけで、この度こうして歩いているだけだ。早く戻って駄賃の酒を一杯引つ掛け、力カアを抱いて寝ちまいたい。むっちりした尻を掴んで揺すってよう……

「なあ、なあ。オニというのは、空を飛ぶというのはほんとかい？ 真つ赤な顔に四、五寸もある鼻を突き出して、尖った角に尖った牙、赤子をばりばりと骨まで喰らうというのはほんとかい？」

言いながら、奉書を抱いた男はへっぴり腰になっていた。子どものような問いに呆れたのか、連れからの返事はない。一寸先も見えぬほど濃くなってきた霧の中、ばさばさと音を立てて藪をくぐる二人連れに、はるか高みで声高に話す声は届いていなかった。

「大体なんでもかんでも、オレらに頼りすぎなんだよ。人間は。いいも悪いも、超常現象に会つと、ピーっと思考停止しちまうんだ

ね。それでアラ不思議、オニが出たわと、こうなる」

「なに改めて呆れてんの。オレらがどんだけオニやってると思つてんの」

山で一番高い杉の梢、そのてっぺんに、見目麗しい若衆が重力に逆らうように立っていた。厚い胸板、固く締まった二の腕は軽量には見えないが、しなやかな杉の小枝はそよとも撓らず、腕組みをして雲の下を透かして見ている。雲の下には霧が立ちこめ、さらにそのずっと下を、男が二人、這うように進んでいた。

「あのさ、そりゃ俺たち雑食だけど、人間も同じようなもんでしょ？人身御供を捧げなきゃなんて、誰が決めた？喰うわけないし」

「喰う、の意味が違うのさ」

先ほどから答える側に回っているのは、腕組みをしたほう、赤い胸衣に漆黒の翼の若者だ。よく見れば翼には緋色がぼやぼやと混じり、それが名となっていた。

「猩々丸。意味って」

「そりゃお前」

猩々と呼ばれたオニは、連れに流し目を送った。

ほんとにわかんないのかよ。

もう一人、丸っこい少年は斑の入った髪を長く垂らし、翼はない。一段下の枝で胡座を組んで若者を見上げている。猩々丸に抱えられてここまで登ったのだ。その斑の見かけから、竈馬、もっぱら渾名で呼ばれていた。

「人身御供といえば、若いきれいな女だろ？」

「うん」

「だいたい、無垢の乙女と相場が決まってるだろ？」

「…」

「全部、俺らのご先祖の所為だよ。」

「なんで？」

猩々はため息をついて、無邪気な丸い顔を見つめた。

「ご先祖はだな。多分、最初にオニと呼ばれた男はだな。そりゃ

あ迷惑な男だったってのは知ってるだろ？」

こくと頷く少年の顔の遥か下で、小さく人間が進むのを狸々は目で追っていた。

「あれだっけ、その、自分の力が自慢でたまんなかったご先祖は、飛んでみせたり、消えてみせたり」

「そう。もうハチャメチャ。で、人間に祭り上げられた。初代、オニだな」

「俺ら、みんなそうじゃん。村の男はみんな何かできる。みんな違うけど。」

「ああ。ご先祖の自己顕示欲のせいで、おれらはオニとしてずっと働いてるってわけだ。」

じこけんじ…。竈馬が口の中で繰り返すのを無視して、狸々は愚痴を連ねた。

「どうせ言う事を聞いてやるなら、若い女でももらおうと、初代が欲をかいいたんだよ。恥ずかしいねえ。それで人身御供はピチピチの処女、しかもルックスがよくなきゃねと、こうなった。おかげさまで、見てみる。うちの村の女衆の別嬪ぞろいなこと。そのうち手に余る女は、神隠しから戻ったとかでよその村に返すようになった。…手をつけた後でな。…オニが人を喰うってのは、そっちの話」

本当にわかったのか、少年はからからと笑い声を上げた。

「だからオニの面で、鼻がでかいやつがあるのか」

「それは天狗だ。人間からすりゃ別物かもしれんが、どうせ俺らのことだよ。」

「あの鼻…精力絶倫のシンボルか」

青年は呆れたように目をぐるりと回してみせた。

「ああ。そういうことだ」

ぞんざいに油紙のコヨリで縛り上げた髪はきちんと前髪を作らず、無造作に顔にかかって、秀でた額を半分も隠している。ぱらぱらと顔を隠す髪の間から、切れ上がったふたえの眦がのぞいていた。まったくすぐに通った鼻梁が端正な横顔は、雲間を覗き下ろして微笑んだ。

「鳥居に着いた」

予告もなく竈馬の丸い胴を後ろから抱えると、背面から跳んで、ふたりは真つ逆さまに落ちた。

「しょ、しょーじょー！こーういことすんなあ！！！！」

甲高い声は、笑いとともに、雲と霧とに紛れて散った。

古びた鳥居の向こうには、茶箆笥ほどの社がちんまりと据えられていた。足下はびたびたと湿った沼で、草蛙履きの足をじつとりと水気が這い上がる。蛭でもいやしまいかと、男たちはおっかなびつくりの足取りで鳥居をくぐった。野良仕事で荒れた太い指先が小さな取っ手を摘む。震えながら観音開きに開くと、汗だか霧だかに湿ってしんなり折れた奉書を捧げ持ち、そつと社に置いた。

「おねげえします。オニさまにおねげえいたしやす。川が溢れませんように、どうか新田の先で、それから鎮守の森の先でもういっぺん、川を曲げてくだせえ。何度堤をこしらえても、かならずあすこで破れちまいます。なにとぞ、どうか、オニさま。おねげえいたしやす。次の朔日の晩、村一番の器量よしを差し上げやすから。なにとぞ」

なむなむと唸り、男たちはパンパンと柏手を打った。社のすぐ上で、神木の桂に座っていた猩々は、肩をすくめて首を捻った。

「柏手はやりすぎじゃね？おれらは八百万とは違うつてのに」

「たしかに。八百万は手をくださない主義だもんな」

急降下でまだふらつく頭を回しながら、竈馬が唸る。男たちが背を向けて二三歩出たのをきっかけに、猩々は朗々とした声を作った。

「きつとな」

一言だけだった。雷に打たれたように振り向いた男たちは、次に股間を押さえて一目散に走りだした。あつという間に消えた逃げ足の速さに呆れるやら感心するやら、猩々は音もなく枝から滑り降りると、奉書を取り上げて社を閉めた。

「今度は川だあ？おいおい、こりゃあ要相談だな、おい。水神が

絡むのか…おれはシングルタスク向きなんだよ…」

ざざざと不格好な音がして、竈馬が枝を滑り降りた。手の中の奉書を覗き込む。

「なんだって？今度のお願いなんだって？」

少年のふざけた口調に、狸々も諦めたように苦笑した。

「帰るぞ。寄合だ。全員、集合」

警戒するような少年の隙をついて胴を抱え、あざ笑うように跳んだ。くるりと宙で一回転すると、ざあっと風が巻き起こる。小さな社は軽く浮き、風に乗って一面に悲鳴が飴した。

あーれ…

…浮いた社がごとんと音を立てて戻り、木々のざわめきがようやく収まった。ヤケクソな歌声だけがかすかに残っていた。

たとえばわたしが恋を 恋をするなら

四つのお願い聞いて 聞いて欲しいの

一つ やさしく愛して

二つ わがまま言わせて

三つ さみしくさせないで

四つ 誰にも 秘密にしてねエ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886p/>

穂仁 オニ の繰り言

2010年12月14日21時08分発行